

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

令和2年 10月 9日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 藤 洋作 様

所属部局・研究科 京都大学人間・環境学研究科

職名・学年 博士課程2年

氏名 的場 敦也

助成の種類	令和元年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	不確実性の中に生きる—キェルケゴールと可能性		
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()		
発表題目	『愛のわざ』における可能性と人間的愛		
開催場所	イギリス・ロンドン・ロンドン大学先端研究所		
渡航期間	令和元年 9月12日 ～ 令和元年 9月15日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	300,000円	
	使用した助成金額	300,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空券代・国内旅費(一部):	180,000円
		学会参加登録料(一部):	5,000円
滞在費(一部):		115,000円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) この度は貴財団より助成をいただき、ありがとうございました。また、本助成の手続きにおいて私の都合によりご迷惑をおかけしてしまいましたが、非常に寛大かつ柔軟な対応をいただきましたことを、深くお詫びし、御礼申し上げます。 近年、研究者のための諸々の予算が削減され、安定した雇用も見込みにくい中、こうした助成をいただける貴財団の存在は本当にありがたく思います。今後とも多くの研究者に門戸を開いて助成していただけると、大変助かります。ありがとうございました。		

成果の概要

京都大学大学院人間・環境学研究科

博士後期課程2年 的場敦也

1. 国際会議概要

- 国際会議名 (和文) 不確実性の中に生きる——キェルケゴールと可能性
(英文) Living in uncertainty: Kierkegaard and possibility
- 主催 (和文) ロンドン大学先端研究所 現代言語学研究所
(英文) Institute for Modern Languages Research,
School of Advanced Study University of London
- 開催地 イギリス、ロンドン
- 開催期間 2019年9月12日～2019年9月14日

キェルケゴールの著作において、可能性 (Possibility) という言葉は、想像力・不安・時間性といった鍵概念と結びつきながら、きわめて頻繁に登場する概念である。本シンポジウムは、現象学・存在論・倫理学・文学といったさまざまな分野・さまざまなレベルの研究者から発表を募り、キェルケゴールの可能性概念を多角的に論ずることで、各研究分野に貢献しうる成果を生み出すことを目的とするものである。

2. 研究発表概要

報告者はこれまでの研究において、キェルケゴール中期の『愛のわざ』の「愛はすべてを希望する」というテーゼの根底にあるのが、「他者の可能性を信じる」という形で現れる可能性概念であるということを見出した。従来、キェルケゴールの可能性概念は、それを支える想像力と関連付けて論じられてきたが、その議論は、自然あるいは神という直接知覚しえないものを認識する契機としての可能性に集中してきた。しかし中期キェルケゴールにおける「他人の可能性を信じる」という可能性理解についてはこれまでほとんど議論されてこなかった。

報告者は、まず中期キェルケゴールの著作活動の目的が後期以降と大きく異なっているために、他者との関係に関して中期のパラダイムは後期以降のそれと根本的に異なっていることを確認した。その後、中期キェルケゴールに存在していた独自の可能性概念を著作並びに日記から析出し、中期キェルケゴールがその独自の著作活動の目的のもとで、ロマン主義の詩人ノヴァーリス (フリードリヒ・フォン・ハルデンベルク) を受容し影響を受けて人間愛が形成される過程を部分的に明らかにすることができた。

以上の内容を本シンポジウムにおいて、「『愛のわざ』における可能性と人間的愛」(英題 Possibility and Human Love in *Works of Love*) として発表予定であったが、残念

ながら、報告者は渡航後の体調不良のため、シンポジウムの全期間にわたって参加することができなかった。後日、基調講演者である Iben Damgaard 氏及び Joakim Garff 氏とは別件で意見を交わす機会を設けることができ、そこで本発表においてさらなる議論が必要な点の指摘やいくつかの示唆をいただくことができた。

3. 謝辞

最後になりましたが、この度は貴財団より助成をいただき、御礼申し上げます。今回給付していただいた助成金に関しては、現地までの渡航費・交通費、学会参加費、宿泊費の一部として使用いたしました。

本助成におきましては、渡航したにもかかわらず発表ができなかった為、報告者は期待されていた助成の目的を十分に履行することができなかったことを深くお詫び申し上げます。今後同様のことがないように、体調管理を含めて努めてまいります。また、こうした事情にもかかわらず、きわめて柔軟かつ寛大に対応してくださいました貴財団に、心より、深くお礼を申し上げます。